

財団法人 黛民族舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C.

NO.10

目 次

中国民族舞踊と稲作文化（２） 前雲南省舞蹈家協会常務副主席 劉 金吾

一 稲作文化中の模擬舞踊と農耕の関係（続き）

- 6. イ族の老虎笙と牛耕…………… 2
- 7. タイ族のガヤン、十二馬と稲…………… 2
- 8. ラフ族の芦笙舞とバイ舞——完備した稲作過程…………… 4

二 稲作文化中の祭祀舞踊…………… 5

- 1. チワン族の灯会と棒々灯舞…………… 6
- 2. トールン族のカチュエワと剽牛舞…………… 7
- 3. ラフ族の祭谷神と飯魂舞…………… 8

自然人アイヌ

- こころの歌と踊り アイヌ文化伝承者 四宅 豊次郎 …………… 9

平成13年度黨民族舞踊文化財団活動予定…………… 11

中国民族舞踊と稲作文化（2）

前雲南省舞蹈家協会常務副主席
劉 金吾

一 稲作文化中の模擬舞踊と農耕の関係（続き）

6. イ族の老虎笙と牛耕

老虎笙の詳しい事情については後出の“稲作文化中の祭祀と舞踊”の一章で詳述するので、ここではその中の稲作舞踊との関連部分だけを述べるにとどめる。農曆（旧曆）の正月八日から十五日にかけての「虎祭り」のうち、七日と八日の晩に老虎笙が踊られる。その第2部のうちの大部分が農業生産の踊りである。田すき（二人が前で犁^{すき}をひっぱり、ひとりが後でそれを助ける）、田ならし（二人が前でまぐわをひっぱり、ひとりが後でそれを助ける）、種蒔き、田植え、収穫、脱穀等の動作がある。踊りの田すきに使う鉄の犁^{すき}、田ならしに使うまぐわ、脱穀に使う脱穀盆、これらは皆実物の生産用具を使用する。二人が前で犁^{すき}あるいはまぐわをひく牛をまね、ひとりが後でそれを助け、また牛を追う動作をする。以上の舞踊からはすでに完全に稲作の時代に入り鉄の犁^{すき}や牛耕が用いられ、土地を平らにする田ならし工法が導入されており、脱穀には脱穀盆が使われる等稲作の生産方式と技術面ではかなりの高水準に達していることが見て取れる。



イ族の老虎笙

7. タイ族のガヤン、十二馬と稲

“ガヤン”はタイ族の一種の民間舞踊である。“ヤン”は一種の民族であり、“ガヤン”とはすなわちその民族の労働を模倣した踊りで、田植え、田のあぜがため、稲モミの選別等タイ族の青年達が最も踊りたがる舞踊の一つである。動作はそれほど複雑ではないが、ある程度の隊列の変化を有する。“ガヤン”の踊りに出てくる田のあぜがための動作はタイ族の稲作がすでに精耕細作の段階に達していることを示しており、田のあぜをぬることはあぜに雑草をはびこらせず、

同時に田の中の水の漏れを防ぐという糧食の収穫増につながる技術工程を説明している。

“十二馬”もタイ族の一種の民間舞踊である。男6人、女6人の計12人からなる踊り手が馬に似せて紙で作った道具を身につけ、腰のまわりには乗馬しているように巻き付け、片方の手に扇子を、もう一方の手には手綱を持って騎馬行進のような小刻みで速い足取りで踊る。十二馬の意味は歌と踊りで十二か月の農事を表現することにある。「歌の長さは全曲で250行を越え、男女のかけ合い形式で1月から12月まで順番に歌っており、



タイ族の田植え

（農業）生産の知識、社会習俗、そして男女間の愛情が融合して歌い込まれている。」「……第二の部分は‘十二馬’の主体であるとともに核心であり、毎月の気候の変化、生産項目、遵守すべき生産生活の習俗が時間の推移に沿って表現されている。第三の部分は結束歌（終わりの歌）と称される終曲部分であり、主として歌の中で表現されている生産知識の重要性を強調しており、観衆にその重要性を忘れることのないよう促している。もしそれを忘れると生産はうまくいかず、忘れなければ豊作を得ることができる。」（注1）

十二馬では1、2、3月は耕作準備の期間であり、このときには主に耕牛にえさをやったりその他の春耕の準備のための労働をする。「‘4月の雨季に入り、トノサマガエルが飲み鳴き騒ぐ’頃、青年達は‘犁で田を耕す’このようにして一月ずつ歌われていく。各月ごとの気候の変化、農業活動の特長、そして労働の情景は具体的にはっきりと叙述されている。」「農業生産では多方面の知識を把握していなければならない。長期にわたる生産実践の中で、タイ族の祖先たちは暑さ、寒さ、ひでり、降雨等の一連の天候の変化が生じる時期の規則を次第に把握し、やがてそれらを季節の変化としてとらえるようになり、またどの時期に種蒔きをし、どの時期に田植えをすればよいのかという認識に到達した。それはすなわち一年十二か月、それぞれの月に最適な農作業があるという、現代人にとってはごく普通の知識ではあるが、古代にあっては苦労して得た貴重な経験のことである。生存のため、そして発展していくためにタイ族の祖先たちはこれらの経験を容易に記憶することのできる言葉として集大成する必要があった。」（注2）そしてそれはさらに優美で魅力的な音楽を配して趣のある舞踊に仕立てられ、後世に伝えられた。それが人々に愛されている歌舞の十二馬なのである。

注1、注2 王松等編著《傣族文学簡史》、雲南民族出版社1988年版

8. ラフ族の芦笙舞とバイ舞——完備した稲作過程

“芦笙舞”と“バイ舞”はともにラフ族の代表的な民間舞踊である。ラフ族の長大な叙事詩《カゲンハゲン》の中に「男は芦笙を吹き、女は手をつなぐ。アヒル歩きをまねては左にゆれたり右にゆれたり、ガチョウ歩きをまねては前に三步後ろに三步。」とあり、いくつかの簡単な芦笙舞の形式の特長と舞踊の姿態の特長を生き生きと描きかつ概説している。ラフ族はヒョウタンを祖先が誕生した母体の象徴として崇拝している。ラフ族はその歌の中で「成熟したヒョウタンがなければラフ族の笙歌もない。」と歌っている。ラフ族は芦笙を吹き、芦笙舞を踊ると天神と交信ができ、神の加護を得ることができると信じている。このことはまた、なぜ芦笙舞の中で稲作生産が、そして完備した稲作過程が詳しく表現されているのかということの原因でもある。

——かくのごとく芦笙舞を踊った後、神の加護で穀物の豊作がもたらされ、稲作に関する知識も代々語り継ぐことができる——そのようにラフ族は考えている。芦笙舞で表現される稲作の知識と生活の動作はとても多く、生産過程の描写は詳細を極めている。土地探し、土掘り、刀研ぎ、地ならし、草の積み上げ、犁の組み立て、犁での地ならし、土掘り土たたき、積んだ草の選別、草の焼却、豆の植え付け、ウリの種の植え付け、種籾まき、田のあぜ切り、まぐわでの田すき、あぜがため、苗代づくり、田植え、田の草取り、稲花の花粉の飛翔、スズメ追い、稲ささえ、風による稲穂倒れ、稲刈り、稲穂括り、竹の細片作り、竹かご編み、むしろ編み、曲がり棒さがし、稲束の積み上げ、脱穀、モミガラとり、稲モミの積み上げ、稲モミならし、稲モミかつぎ、稲モミをよそう、米つき、箕でふるう、キジバトが米をついばむ、柴刈り、三脚を立てる、火おこし、土鍋の組み立て、飯炊き、塩唐辛子を搗く、ご飯の支度、テーブルの準備、食事、喫煙、飲茶、赤ん坊をあやす、もちをこねる等その種類は五十をこえている。

バイ舞はラフ族の女性の民間舞踊である。そのうちの大部分の舞踊は稲作生産と生活の内容と関連し、かつ明確に女性的な特長を持っている。稲作生産をまねた舞踊ではやはり女性が参加する労働が主となっていて次のようなものがある。田の雑草の処理、草運び、土掘り、土すき、苗



ラフ族の芦笙舞

代づくり、田植え、田の草取り、トウモロコシの植え付け、スズメ追い、稲刈り、稲モミを包む、モミ晒し、モミガラとり、米かつぎ、帰宅、牛の放牧、果物摘み、柴刈り、柴かつぎ、火おこし、水汲み、野菜洗い、米つき、唐辛子搗き、食事、食器洗い、箕でふるう、米とぎ、くしで髪をとかす、頭に布を巻く、魚とり、あおいで涼む、洗顔等その数三十余种にのぼる。

以上の芦笙舞とバイ舞に見られ、表現された稲作生産と生活の舞踊の内容はかなり豊富なものであり、そ

れは山地での耕作のみならず主として稲田での耕作を表現しており、稲作の過程の表現にとどまらず同時に犁による田すき、まぐわによる田すき、田のあぜ切り、あぜがため等の技術要求についても説明している。稲作中の主要な労働に加えて、細片を作るための竹割り、竹かご編み、むしろ編み（すなわち稲モミをよそうときは竹かごが必要なように脱穀のときはむしろを地面に敷き、脱穀時に稲モミが地面にこぼれないようにする。またモミを日に晒すときもむしろは使用できる）のような付帯労働についても舞踊で表現されている。同様に稲作生産だけでなく農耕生活についても表現されている。このときのラフ族は稲を脱穀したあと、箕でふるう、米とぎ、柴刈り、飯炊き、食事のときはご飯以外におかずも食べ、調味料として塩唐辛子も搗く。食事を終えたら喫煙、飲茶、赤ん坊をあやす等々……これは生産力が発展し、ある程度の生活水準に到達した後の生活の情景である。同時にバイ舞中には男女の労働にある程度の分業が生じている様も見てとれる。

上記以外にも多くの民族の舞踊の中に稲作生産を模倣した舞踊が存在する。ハニ族のマングー（鉦鼓）舞、トゥオニニ、イ族の田植え鼓舞、大鑼笙、ワ族の草取り歌、トールン族のアワ揉み洗い舞等である。



ジノー族の女性

二 稲作文化中の祭祀舞踊

稲作農耕は自然気候に対して日照や風雨等で密接な関係を有し、それはきわめて依存的な関係であった。先人たちは自然を支配したり征服または制御することができず、自然を巨大な魔力をもつ神霊と見なしていたのでそれに対するさまざまな祭祀や儀礼が形成されていった。「生産力が極めて低く、科学知識が欠乏している条件の下では地を掘り種を蒔く時から作物が成長し、収穫が終わる時までのひとつひとつの生産工程に対し、その工程にほぼ対応する祭祀の形式が存在した。ジノー族を例にとれば旧正月が過ぎた後、第二日目の鋤入れを始める時に村人たちは各戸で、あらかじめ村の入り口のそばの道に前日の晩埋めておいたショウガをまず掘り出す。山の畑に着いた後、“寨父寨母”（村の父母＝村神）がショウガを埋めるのを待って何本かの木を切り倒した後、始めて村人たちはショウガを植えて鋤入れをする。畑を焼くときはまずニワトリを殺し、呪文を唱えてから始める。種蒔きのときには水牛を葬って皮を剥ぎ、地神や山神に捧げて作

物の豊収を祈る。稲が発芽したときにはニワトリを殺して祭り、その後に稲の成長がおもわしくないときは捧げ物の格を上げる。稲の高さが30センチメートル程になると稲魂を祭る。稲が成長する途中で干ばつや虫害、樹木の倒壊、山崩れ等の現象が起こったときは鬼神のしわざとされ、やはり祭祀が行われる。稲の収穫後、稲魂が招かれる。」（注1）これらの祭祀活動のなかで比較的大きなもの、とりわけ天神、村の神、水神、本主（大理ペー族の土着の神）、祖先等を祭る村をあげての祭祀が行われるときには舞踊は不可欠の要素となる。舞踊は神と交信し、神を楽しませる作用をするのみならず舞踊それ自身のもつ力で亡霊を鎮める。以下に述べることは祭祀としての舞踊活動であるが、その一部といえどもすべてを紹介、叙述することは不可能である。ただ祭祀の内容と舞踊の種類の中で代表的なものを選択するにとどめ、簡単な叙述を行うこととする。

注1 楊知勇、秦家華、李子賢編《雲南少数民族生産習俗誌》、雲南民族出版社1990年版、第4ページ。

1. チワン族の灯会と棒々灯舞

毎年新春の日柄のよい折にチワン族は集まって灯会を催す。伝説によると唐代に牛魔の精がチワン族の村の近くの山の洞窟に隠れ住み、村人たちを傷つけたり、家畜を食べたり、そして作物を踏み荒らししたりしていた。村人たちはこの牛魔の精を退治しようと決意し、若者たちは手に手に棒を持ち、牛魔の精を打ちたたこうとしたが牛魔の精は洞窟から出ようとしなかった。娘たちは花柄の手巾を手にもち牛魔の精を誘ったがやはり出てこなかった。そこで村人たちは相談をして夜に灯籠をかかげ、棒々舞を踊り、手巾舞で誘うことにした。踊りは三日三晩の間続けられた。



チワン族の舞踊

牛魔の精が外を見るととても色鮮やかでにぎやかなので外に出たくてうずうずしてきた。牛魔の精が頭を突き出したまさにその時、洞窟の両側に隠れて待ち伏せしていた若者たちがすかさず棒を打ち降ろすと牛魔の精の顔面はまっ二つに割れた。（それ以来棒々灯舞を踊るときには牛魔王のお面は半分のままだという）人々はたたき割った牛魔王の顔を持って村に帰った。全村の老若男女がお祝いに集まり、この大勝利を記念して毎年正月の二日から十六日まで灯会を催し、踊り楽しむことにした。灯会のときには棒々舞の他に若者たちは牛頭灯、虎頭灯、狐頭灯を持って踊る。娘たちは片手に手巾、もう一方の手には牛灯、羊灯、豚灯、馬

灯、鶏灯、魚灯等を持って舞う。それは明らかに勸善懲惡、五穀豊饒、六畜興旺を意味するものである。ある地方では灯の上に“唐王佑凡間、仙女保黎民”“国泰民安日、風調雨順年”、“灯光四壁朗、鑼鼓場上喧”等々の対聯（対句を書いた掛け物）を貼り、横聯には“恭賀新年”、“人口清吉”、“五穀豊登”、“六畜興旺”と書く。春に行われる祭りはそのほとんどが稲作生産と関係があり、春の灯会はみな（稲が育つようにという）願いと祈りである。チワン族は比較的早くから農耕の時代に入り、稲を植える歴史は長く、そのため春の祭りである灯会は特に盛大でにぎやかである。棒々灯舞もまたチワン族の持つ代表的な舞踊となった。



トールン族の剽牛舞

2. トールン族のカチュエワと剽牛舞

“カチュエワ”はトールン語で旧正月という意味である。この祭りはトールン族では一年のうち最も重要な伝統的な祭日である。年越しのときには村ごとに、また各家庭毎に互いに招待しあってたくさんの食べ物を山ほど準備して新年を祝う。祭りの日は一般には旧暦の十二月、具体的な日は各家庭あるいは村毎に卦で占った吉日をその日にあてる。年越しの日には全村の老若男女が祭日の晴れ着を身にまとい、招いた客人を伴って村の中の広場に集まり、最も盛大な儀式である“剽牛祭天”（牛を捧げて天を祭る）を行い、来る年の天候が順調で五穀がよく実り、村人や家畜が無事で健康であるように天神に加護を祈る。先ず牛を広場の中央につなぎ、選ばれた若い娘がめでたいしるしにその牛の角に色とりどりの珠飾りをかけ、牛の背を麻の布で覆う。続いて勇敢な若者が鋭利な長い竹槍を持ち、広場に進み出て牛の急所をよく見極めてから猛然と突き刺す。牛が倒れてから広場にいる村人たちは自然と円をつくり、ドラをたたいて楽しそうに牛鍋庄舞を踊り始める。旧正月の二日目の早朝にはいくつかの村で狩猟の祭りが催される。朝日が昇ると共に、村人たちはそばをこねて作った様々な動物の頭の模型や祭祀用の品々を家の後の傾斜地の畑に並べてたいまつを燃やす。祭司の祈祷の後、若者の射手たちが弓をつがえて矢を放つ。様々な動物の頭の模型がすべて射抜かれた後、祭司はまわりを取り巻いている村人たちに向かってその動物模型を撒く。その時にドラや太鼓が一斉にたたかれ、村人たちは思う存分踊りまくる。

この牛鍋庄舞は足運びは簡単でテンポはゆっくりしている。この踊りは敬虔に天神を祭るものであると同時にトールン族の一年間のつらい労働のあとの感情の発露であり、極度に劣悪な自然環境下でのトールン族の生存、自然との戦い、そして艱難辛苦の生活の証しでもある。カチュエワの祭祀活動の中に見いだせるのは、トールン族とその系統の人々が狩猟を主とした生活を離れて稲作農耕に入っていく時期のものであり、そのため天神に順調な天候と五穀の豊饒への加護を祈るだけでなく狩猟でも多くの獲物を獲れるよう加護を祈るわけである。

3. ラフ族の祭谷神と飯魂舞

農業の祭祀活動の中で種子に対する崇拝は重要な位置を占めている。当時の人々にとっては、一粒の種子が地中に入ってから、成長してあのようにたくさんの糧食を生み出すという神秘的な現象はなかなか理解し難いものであり、種子を神聖化せざるをえなかった。人々は種子を神霊として祭り、人と同じように種子もまた霊魂をもつものと見なし、もし穀物神をおろそかに扱えば、あるいは稲魂がひとたび離れてしまうともはや豊作は期待できないものと思われていた。このため雲南の多くの少数民族の間では稲魂を祭ることがさかんに行われていた。種蒔きの前には稲魂を家の中に招き入れ、種蒔きを終えてから田に稲魂を送らなければならず、収穫の前には祭祀をとり行い、様々な神々に農作物の保護のお礼をし、また穀物を田畑から家に持ち帰るときも稲魂を勧請する必要がある。脱穀のときにも驚いたりあるいはその他の原因で遊離してしまった稲魂を呼び戻さなければならなかった。そうしないと稲モミの中身はからっぽになっているからである。一切の民族の習俗と祭りの祝詞で見られるのは、彼らは稲魂を崇拝する祭祀に対して大変敬虔であり、慎重で注意深くその儀式を行うことである。ハニ族は稲を収穫し、脱穀するとき大声で話すことを嫌う。大声を出すと稲魂が逃げてしまうからである。ジノ一族は稲魂が帰る途中の二股の分かれ道に、稲魂が迷わないようにとひと枝の花を道しるべとして置いておく。チンポー族は田畑で穀物が牛に食べられたり盗まれたりした時、やはり稲魂を勧請する。その時の祝詞は「人には見えないものをあなたは見て、人にできないことをあなたはなしとげる。稲魂様、どこにいらっしゃったのですか。どうか早く帰って来てください。」というような稲魂への讃美にみちたものである。



ラフ族の舞踊

翻訳：黛民族舞踊文化財団 藤原明人

自然人 アイヌ こころの歌と踊り

アイヌ文化伝承者
四宅 豊次郎

第7回

私達が住んでいる阿寒町や釧路湿原には、丹頂鶴が棲息している。

世界中に鶴の種類は十五種いて、他の鶴はマナヅルやクロヅルなどと呼ばれ、ツルの文字がついているけれども、丹頂鶴だけはどういう訳か、学名を「タンチョウ」といいツルは付かない。

しかし、私達はこれまで丹頂鶴と言って親しんできたので、ここでは丹頂鶴にする。

丹頂鶴は、頭の上にまるで赤いベレー帽を被ったように赤色部があり、頬や喉は黒く、地上にいと尾に見間違われる羽毛は、風切羽の一部である。大形の姿は美しく、代表的な鳥の女王とされている。

アイヌ民族は、この丹頂鶴のことを、サロルン カムイ（湿原に住む神様）として、日頃より大切にあつかってきたのである。

奉納舞踊（4）

鶴の舞（サロルン カムイ リムセ）
sarorun kamui rimse
（湿原の）（神様）（舞踊）

フン トーリ フン チカプ
hun to-ri hun cikap
（かけ声）（鳥）（かけ声）（鳥）
アーアホーオー アーアホーオー
a-a ho-o-o a-a ho-o-o
（かけ声）（かけ声）
ホーイホーオー
ho-i ho-o-o
（かけ声）

（互いにかけて合い、くり返して歌う）

“あゝ鳥よ、あゝ鳥”

と丹頂鶴の舞っているようすを、感動をこめて歌っている。この鶴の舞も、鳥と呼んでいるほかは、殆どかけ声だけなので、フシコ ウポボ（古い歌謡）の部に入る。

いろいろな訳があるけれど、春雪解けの頃に、恋愛中の雌雄の丹頂鶴が、愛を讃歌して叫び、舞っている姿を表わしていると考えるのが、最も自然であろう。（四宅 ヤエ談）

鶴の舞はアイヌの着物の裾を、鶴の羽のように大きく広げて舞い踊ると同時に、ときどき鳴き



夫婦の丹頂鶴

叫ぶ鶴の甲高い声が、あたりに響きわたって美しい。

ふだんは四名で踊り、中程に立っている二羽が親鶴で、両端にしゃがんでいる二羽が子鶴。親鶴が子鶴に飛び方をおしえ、やがて上手に飛べるようになり、四羽揃って大空へ舞いあがってゆく様子を表している、という気持で阿寒湖アイヌコタンの踊り娘達は舞っている。

鶴の舞は、たいへん縁起のいい踊りであるから、祭事や祝いの中では一番先に披露され、女性の舞踊の中でもっとも優雅であると評されている。

丹頂鶴は、湿原の神様といわれているように、たいへん気位の高い鳥で、他の野鳥など側に寄せつけない。

アイヌは昔から、そのような性質をよく知っていたので、あまり近づくことはなく、遠くから眺めるようにしていた。

丹頂鶴は、とても夫婦仲がよく、一度結婚すると死ぬまで別れない。だから日常は二羽で生活しているが、子供のいる場合は幼鳥が成長するまで3羽で暮らす。

もし夫婦のうち、どちらかが病気や何らかの事故で死んだとき、その死体が地上にあるうちは当然だが、月日がたち死骸が白骨になっても見えている間は、残された鶴はその場を去ろうとしない。

元来、アイヌ民族は心根が優しいので。そのような状況を見ると、その姿があまりにも悲しうなので哀れに想い、鶴が餌など求めてその場を離れた隙に、死体を隠したり土の中に埋めたりして、見えないようにしたのであった。

ひとり取残された鶴は、しばらくの期間、寡暮らしをしているが、やがて時期がたつと諦めて、新たな伴侶を探すことになる。

仲のよい夫婦のことを《鶴の夫婦》に喩えて、わが阿寒町では、毎年一月の行事「丹頂フェスティバル」に、全国から三組のカップルを募って、丹頂結婚式を催し人気が高い。

タンチョウは釧路地方以外では、中国北部と朝鮮に棲息している。

釧路地方のタンチョウは戦後減少して、一時期は三十羽程までに減り、国の特別天然記念物に指定された。

その後、地元民の奉仕による給餌活動が続けられ、現在は保護政策も実って、五百数十羽までふえている。

昔から鶴はめでたい鳥とされてきたので、我コタン（村）のメノコ（アイヌの女性）達は、数あるアイヌ舞踊の中でも、この鶴の舞を踊るときが一番楽しいようである。



鶴の舞



岩手県・東和町春日流落合鹿踊り

平成13年度黛民族舞踊文化財団事業日程

5月14日（月） 黛民族舞踊文化財団総会

6月30日（土）～7月11日（水）中国雲南省舞蹈家協会第9次訪日代表団来日

訪日代表団交流会日程

7月1日（日） 岩手県東和町「鹿踊り」取材

7月3日（火） 新潟市天寿園

7月5日（木） 神奈川県藤沢市民会館小ホール

7月7日（土） 群馬県新田町文化会館エアリスホール

7月8日（日） 学習院創立百周年記念会館

7月9日（月） 長野県松本市林友渚カナディアンホール

編集後記

舞踊文化E. T. C. は年二回発行予定 ※皆様からの投稿をお待ちします

平成13年5月14日 財団法人 黛民族舞踊文化財団

港区赤坂3-10-3 電話 03-3583-3633・3606

FAX 03-3583-3639